

学生海外調査研究	
19 世紀後期における音楽流通について—ヨアヒム・ラフを通して—	
氏名 倉脇 雅子	比較社会文化学専攻
期間	2018 年 9 月 2 日～2018 年 9 月 23 日
場所	ミュンヘン、ラッヘン、フランクフルト、ヴィースバーデン
施設	バイエルン州図書館、ラフ記念館、ドイツ国立図書館、ヘッセン州立アルヒーフ

1. はじめに

執筆者は、ヨアヒム・ラフ（Joachim Raff, 1822-1882）の交響曲第 3、5 番、組曲第 1 番の流通経路を明らかにしようとしている。これは、上記の作品が現在とは異なり、19 世紀後期のドイツ国内外の演奏会において多く上演されていたからである（Grotjahn: 1998）。このため、彼の作品を当時の文脈に位置付けることは、執筆者がラフを主題におく博士論文において、本論を構成するうえで必須となる。そして、この位置づけを明らかにするためには、ラフ及び彼の作品と同時代人の関わりを知り得る一次資料の調査が必要とされる。

今回の調査は、平成 28 年度お茶の水女子大学「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラム（以下、「学生海外派遣」）の援助による調査研究の成果に基づくものであり、平成 30 年度の調査において中心となる課題は次の三点である。第一点目は、バイエルン州立図書館（以下、BSB）所蔵の *Raffiana* の調査である。第二点目は、ヨアヒム・ラフ・シンポジウム（ヨアヒム・ラフ協会主催、於ラッヘン）と開催中に公開されるマーティ・コレクションの閲覧。そして第三点目は、ラフ及び同時代作曲家の組曲についての調査を BSB、ドイツ国立図書館（以下、DNB）、ヘッセン州立中央アルヒーフ（以下、HSA）を行うことである。上記三点について、調査の目的と意義(2.1)、調査方法(2.2)、調査成果(3)の順に述べていく。

2. 研究概要

2.1 調査の目的、意義

2.1.1 *Raffiana* について

博士論文では、ラフと同時代の音楽家（フランツ・リスト（Franz Liszt, 1811-1886）、ハンス・フォン・ビューロー（Hans von Bülow, 1830-1894）、カール・ライネッケ（Carl Reinecke, 1824-1910））との関係に着目し、ラフ作品の流通経路を明らかにしようとしている。その方法によって、現在とは異なるラフ作品の普及について、当時の人々が彼の作品をどのように理解し受容したのか、について一次資料から考察を行っている。ここから、ラフの音楽活動全般を知り得る一次資料である *Raffiana* を対象とし、上記に挙げた三人の音楽家との交流を手掛かりとして調査を行うこととした。前回の BSB の調査では音楽部門所蔵の資料の一部を閲覧、複写したが、今回は、遺稿、手稿部門のマックス・シュライバー博士とのコンタクトによって当部門が所蔵する全ての *Raffiana* を閲覧及び執筆者が必要とする全ての資料の複写が許可された。これにおいて本調査は、①ラフが当時どのような人々と交流をもっていたのかを網羅的に知りうる点、②*Raffiana* の全容とその保管の経緯を知りうる点、において研究意義が高められている。

2.1.2 ヨアヒム・ラフ・アルヒーフ・ラッヘン（JRA）について

チューリッヒ湖畔のラッヘンはラフの故郷である。1972 年にこの地を本拠地としてヨアヒム・ラフ協会（Joachim Raff Gesellschaft）（以下、JRG）が設立され、2018 年 9 月にラフ記念館が竣工した。そして、この記念館とアルヒーフの創設を記念したシンポジウムが 2018 年 9 月 7～9 日に開催された。

アルヒーフの主たる内容は、JRG 会長であるレス・マーティ氏個人所蔵のマーティ・コレクションと BSB 所蔵 *Raffiana* に基づく複製と一部の翻刻である。マーティ氏は彼の父親と二代続いて JRG 会長を務めており、マーティ氏の先代とラフの親戚が中心となって JRG が設立された（Marty 2014）。マーティ・コレクションには、JRG 発足当時から収集されたラフの一次資料が含まれている。このため JRA

の閲覧と研究テーマに関わる資料の収集を調査目的とした。

また、日本においてラフを中心に扱う研究は執筆者の知る限りこれまでになく、国内においてラフ研究の進捗を知り得る機会は皆無である。近年を眺めてもラフを扱う包括的な研究発表は本シンポジウム以外になく参加の意義が認められる。また、当シンポジウムにおいて、①BSB 遺稿・手稿部門のマックス・シュライバー博士による *Raffiana* についての発表も予定されていたこと、②BSB での調査が可能となったのは、前回の「学生海外派遣」によって JRG 会員との知己を得たこと、の二点を鑑みて、ラフ研究の現在の状況を把握すること及び研究者間の交流を目的としてシンポジウムに参加した。

2.1.3 DNB 及び HAS における調査について

1850～75 年にかけての音楽誌、*Signale für die musikalische Welt* に掲載された演奏会予告についての調査 (Grothjahn 1998) によれば、当時の新作作曲家のうち、ラフの交響曲第 3 番《森にて》、並びに組曲第 1 番の上演回数は上位 10 位以内に入る作品である。このうち、交響曲第 3 番の流通経路については、「ヨアヒム・ラフのヴィースバーデン期 (1856～1877 年) における音楽活動—セルフ・プロモーションの観点から—」と題して 2017 年 12 月に民族芸術学会東京支部例会において発表を行った。そこで、本調査では組曲第 1 番について、自筆譜の調査並びに組曲の出版に関する出版社や公演についての指揮者との書簡を BSB の音楽部門並びに遺稿・手稿部門において調査を行う。また、ラフと同時代の作曲家であるフランツ・ラハナー (Franz Lachner, 1803-1890) についても併せて調査する。それは、彼がミュンヘン王立歌劇場の音楽監督 (1852～1865 年) であり、ミュンヘン大学から名誉博士号を授与 (1862 年) されたことから、BSB にラハナーの一次資料が残されているためである。そして、HAS では、当時のヴィースバーデン宮廷劇場の劇場広告の調査を行い、DNB では、19 世紀半ばのドイツを中心とした交通網、及び地図について調査することを目的とした。

19 世紀半ばの組曲の研究には、*The wellsprings of neo-classicism in music: The nineteenth-century suite and serenade* (Morris 1998) があり、組曲とセレナーデが 19 世紀を通していかに新古典主義の作品に用いられるようになったかについて論じるなかで、19 世紀に組曲を作曲した一人としてラフを紹介している。しかし、交響組曲だけでなく、ピアノと室内楽においても組曲を作曲しており (Bork; Hippchen 1998)、ラフの組曲に対する関心の高さが窺える。このため、ラフの組曲を当時の文脈に位置付けて再考することは意義深く、そのための手がかりとなる一次資料調査が必要とされる。

2.2 調査方法

2.2.1 *Raffiana* について

BSB 遺稿・手稿部門では、当部門所蔵の *Raffiana I~XII* の閲覧と複写を行った。事前に日本よりメールにてコンタクトをとり、マックス・シュライバー博士から、全ての *Raffiana* の閲覧の許可を頂き、調査においてはアンヌマリー・カーライン氏がアシスタントとして付いてくださることをお知らせいただいた。また、*Raffiana* の一部が音楽部門に移管されていることから、ラフの手稿譜の調査は音楽部門にて行った。

2.2.2 ヨアヒム・ラフ・アルヒーフ (JRA) について

執筆者が現在把握するヨアヒム・ラフの一次資料の主たる所蔵館は、BSB、JRA、J.P.モルガン・ライブラリー&ミュージアムのコレクションである。本調査においてラッヘンでは JRA が所蔵するマーティ・コレクションについて 9 月 10 日に閲覧とインタビューを行った。

2.2.3 ラフ及び同時代の組曲について

BSB 遺稿・手稿部門所蔵の *Raffiana* の調査、ラハナーの組曲に関する資料調査、及び音楽部門所蔵の組曲の手稿譜の調査を行った。また、ラフ作品の公演状況を HSA においてヴィースバーデン宮廷劇場の公演を中心に調査を行い、19 世紀後半の地図と交通についての二次資料の調査を DNA において行った。

3. 調査成果

3.1 *Raffiana* について

Raffiana は 1926 年にラフの娘であるヘレーネが、ヨアヒム・ラフとヘレーネ自身の資料を BSB に寄贈したものであり、全体で 9000 点を超える資料である。寄贈された当時はヘレーネによる目録が付されていた。そして、その後 BSB によってその一部の手稿譜は音楽部門に移管され、現在は BSB の目録によって管理されていることが明らかとなった (シュライバー博士のシンポジウム発表による)。

番号	<i>Raffiana</i> の内容
I	ヨアヒム・ラフ宛の書簡
II	ヨアヒム・ラフからの書簡
III	種々のもの：リブレット（抄録、演奏会資料、個人的な資料、メモ）；ラフに関するもの；プログラム；ラフと関係のない資料
IV	ヘレーネ・ラフ。アントニー・ゲナースト、ドーリス・ラフの日記
V	ヘレーネ・ラフからの書簡
VI	ヘレーネ・ラフ宛の書簡
VII	ヨアヒム・ラフからの書簡
VIII	ヨアヒム・ラフ宛の書簡
IX	ドーリス・ラフからの書簡
X	ドーリス・ラフ宛の書簡
XI	ラフ家からでも宛でもない交流の記録
XII	種々の手稿とタイプ打ち：ヨアヒム・ラフ、ドーリス・ラフ、ヘレーネ・ラフに関する資料
XIII	ヘレーネ・ラフの草案
XIV	楽譜（1992年に音楽部門に移管 XIV A 10 及び XIV B 22）
XV	写真

表 1. BSB の分類による *Raffiana* の内容について（倉脇作成）

表 1 の BSB の分類による *Raffiana* は、ヨアヒム・ラフ、ドーリス・ラフ（ラフの妻）、アントニー・ゲナースト（ラフの義父）、ヘレーネ・ラフ（ラフの娘）の家族関係によって分類されている。

Raffiana I には、全体で 276 人（及び団体）の書簡が所収されており、その一部には、ビューロー（1847～85 年 18 点）、ライネッケ（1865～76 年 19 点）、友人である J. シュトックハウゼン（1878～88 年 38 点）、ピアニストの C. シューマン（1878～82 年 21 点）、リスト・サークルの一人であり、友人のエルトマンズデルファー（1873～82 年 30 点）がある。*Raffiana II* には、リスト（1846～58 年 8 点）、シュトゥットガルト期の友人である H. クニグンデ（1849～53 年 19 点）が収められている。*Raffiana III* は、リブレット 3 本とオペラ《サムソン》に関する資料があり、*Raffiana IV～VI* は、ヘレーネ・ラフに関する資料である。この中の重要な資料には、ビューローとの書簡の交換がある。*Raffiana V* のヘレーネからビューロー宛（1884～94 年 52 点）、ビューローの妻であるマリー・フォン・ビューロー宛（1887～1941 年 434 点）、及び *Raffiana VI* ビューローからヘレーネ宛（1873～92 年 37 点）、マリーからヘレーネ宛（1903～41 年、192 点）である。*Raffiana VII* は、主にラフが家族にあてた書簡である。*Raffiana VIII* は、ラフ宛の出版社（者）と音楽家の書簡である。出版社はブライトコプフ・ウント・ヘルテル（1875～82 年、19 点）、リコルディ（1870～77 年、12 点）をはじめとして 37 社にのぼる。また、音楽家には、リスト（1846～61 年、45 点）の書簡がまとまっている。*Raffiana IX* は、ドーリスからの書簡であり、ビューロー（1874～92 年、19 点）、マリー・フォン・ビューロー（1885～1912 年、14 点）を含む。また、ラフへの書簡は 1851～82 年に 351 点ある。*Raffiana X* ドーリス宛の書簡には、出版社と音楽家が含まれており、ラフが亡くなった後にバーン社（1882～85 年、6 点）、ブライトコプフ社（1882～83 年、7 点）がある。音楽家からの書簡は、ビューロー（1868～92 年、15 点）、ラフのフランクフルト・ホーホ音楽院時代の弟子であるミュラー＝ロイター（1905～09 年、21 点）、ラフの作品目録の編者であるシェーファー（1886～92 年、25 点）がある。*Raffiana XI* は、マリー・フォン・ビューローや、F. ヒラー（1811～85）をはじめとするラフに関係ある音楽家がラフ以外に宛てた書簡が所収されている。*Raffiana XII* は、ラフ自身が作成した作品目録、作曲のスケッチ、ブライトコプフ社との往復書簡が含まれている。*Raffiana XIII* は、作家であったヘレーネのスケッチ 224 点であり、*Raffiana XIV* は、現在、音楽部門に移管されたラフの手稿譜である。最後となる *Raffiana XV* は、ラフ

の家族、知人、及び当時の音楽家の写真が収められている。

調査期間中は、カーライン氏と調査の進捗を相談しながら行うことができた。これは、調査を効率的に行うこと、そして派生的に必要な更なる調査の進行においても有難いことであった。申し込んだ資料の複写については後日の入手となるため、*Raffiana* の調査に基づく分析結果を公表することは現時点では控えるが、成果の一部であるビューローがラフに宛てたの書簡の翻刻を中心とした「ヨアヒム・ラフとハンス・フォン・ビューロー」を、『お茶の水音楽論集』に投稿の予定であるとともに、博士論文の本論における論拠として満足のいく調査が行えたことを報告する。

3.2 ヨアヒム・ラフ・アルヒーフについて

ヨアヒム・ラフ・アルヒーフ内に所蔵されるマーティ・コレクションは、ラッヘン及びチューリヒの銅版画やスケッチがあり、19 世紀当時のスイスの様子を知り得るものである。そしてこの他には、ラフ作品の初版、劇場広告、自筆譜、書簡、写真がある。

3.2.1 劇場広告

コレクションには 1850～80 年代のラフ作品上演に関する多く劇場広告が閲覧できた。その一部として、①ビューローのデビュー・リサイタル (1848 年、シュトゥットガルト宮廷ホール) での劇場広告には、ラフのピアノ曲である、幻想曲 op.42 (1847) が含まれている。これは、ビューローの生涯にわたるラフ作品の演奏の最初である。また、1851 年にヴァイマル宮廷劇場で初演されたラフのオペラ《アルフレッド王》の劇場広告、ならびに《アルフレッド王》の記事 (*Illustrirte Zeitung*, 1851 年 3 月 3 日付、ライプツィヒ) も併せて閲覧した。《アルフレッド王》上演に際しては、リストの支援に拠るところが大きく、リストの関連にする作品の流通経路を知る事例として重要なものである。

3.2.2 自筆譜

《三つのリート》op.49 (1848) の自筆譜には、ヴァイマル宮廷劇場の歌手であるミルデに宛てたラフによる手書きの献呈の辞が書かれている。また、ピアノのための組曲第 1 番 op.91 のペータース社による初版を閲覧し、その他のラフの組曲の初版の所蔵先を確認した。ビューロー作曲のバラード op.16 のヴァイオリンパート譜には、ビューロー自筆のラフ宛の献辞が記されている。

現存するラフの自筆譜は、彼の 300 曲を超える作品数に対して少なく、今回の調査でも BSB とマーティ・コレクションで閲覧できた作品にとどまった。マーティ氏とシュトゥットガルトの出版社であるノルトシュテルン社代表のフォルカー・トスタ氏によれば、ラフが出版社に自筆譜を渡してしまい手元に残していなかったことが原因であるらしい。

3.2.3 書簡

書簡は、マーティ氏の調査によるリストとブレンデルの書簡 (ゲーテ・シラー・アーカイヴ所蔵) の複写の他、BSB 所蔵の *Raffiana* の複写が含まれていた。このため、マーティ・コレクションにのみ所収されている資料についてお尋ねしたところ、資料は年内 (2018 年) にもカリオペに掲載する予定であるとのことであった。

3.2.4 シンポジウム

今回のシンポジウムでは、作品研究 (交響曲、ピアノ曲、室内楽、歌曲)、教育、受容、資料、の各点から発表が行われた。発表者は、ドイツ各地の研究者及びチューリッヒ大学博士課程の学生である。執筆者は、同じドイツ語圏に生きる彼らがラフをどのように捉えているのか関心があつた。各発表に共通する点は、1990 年代におけるラフの再評価¹をふまえてはいるが、現在ではその議論を出発点とするのではなく、ラフという作曲家そのものを中心に据えていることであり、そのうえで各々のテーマにそって新しい知見が発表された。

3.3 組曲に関する調査

DNB では、音楽流通に関する二次文献及び、19 世紀半ばの地図、交通 (鉄道、船舶) のについて各資料の閲覧と複写を依頼した。HAS では、当時の新聞 [HHStAW, 1098, 650] *Sammlung nassauischer Zeitungen* (1848～1870 年) の閲覧と必要箇所の複写を依頼した。複写を依頼した資料はいずれも手続後、データで送信される。

組曲については、次の二点の成果があつた。①ラフのピアノ、室内楽、管弦楽における組曲の作品をビューローが当時実際に演奏していたことが明らかとなった。ピアニストであり指揮者でもあつたビューローとラフの関係を当時の社会情勢、インフラの整備状況とともに、BSB 所蔵の多くの書簡を照合しながら分析を進めることによって 19 世紀における組曲について、作曲家、演奏家、聴衆という多角的な観点をもって考察しうることが期待される。②ラフとともに組曲のジャンルで人気の高いラハナーの資料も BSB に多く所収されていることが判明し、ラハナーについても充実した資料調査を行うことができた。ここからラフの組曲を同時代作曲家と比較することが可能となり、①の成果と併せることによって当時の社会的、音楽的状況をより精緻に捉えることが可能となることが見込まれる。

4. まとめと展望

今回の一次資料調査の成果は、第一に、当時の有力な音楽家（ビューロー、ライネッケ、リスト）のラフ作品公演に関わる資料から、ラフ作品の流通経路に関わる資料調査ができたことである。ビューロー及びマリー・フォン・ビューローの書簡からは、ラフだけでなく妻のドーリス、娘のヘレーネとの家族間での交流が認められた。ラフとビューローについては、ピアニストであり指揮者であったビューローの音楽活動を通して、本調査で得られた多くの資料から明らかにしていく。また、ゲヴァントハウス管弦楽団総監督時代のライネッケの書簡は、ラフの交響曲の上演の経緯を示すものである。加えて、今回の調査では、ミュンヘンで音楽監督を務めたラハナーとの交流を示す資料も見出された。今後これらの精査を行うことによって、詳細にラフの音楽活動を当時に位置付けることができると考えている。そして、リストについては、前回調査を行ったゲーテ・シラー・アーカイヴの資料と併せて分析を進め書簡の交換からリストとラフの関係について再考したい。

執筆者は今回までの調査研究において、現存するラフの資料の所在とその内容についてほぼ網羅できたといえる。しかしながら、ラフ研究者間で問題となっているのは、①ラフ自身が書いた書簡の所在、②自筆譜の少なさ、である。この二点については今後も研究を進めるなかにおいて注視していきたい。

今回の調査は、ドイツの史料を使用して研究を行う執筆者の研究にとってなくてはならないものであった。そしてその成果は、調査に基づく論考として近く公表する予定も伴っている。こうした実際の成果のみならず、女性研究者、アーキビストと共働したことは、執筆者に大きな刺激となった。これは女性リーダーの育成に関わる本調査研究の目的としても適っているといえる。

5. 謝辞

本調査の遂行にあたっては、お茶の水女子大学文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの援助をいただきました。大変貴重なご支援を賜りましたこと、ここに記し御礼申し上げます。

また、現地で大変お世話になったアンヌマリー・カーライン氏、マキシミリアン・シュライバー氏、論文指導を頂いている永原恵三教授に心から感謝を申し上げます。

注

1. ドイツ語圏の交響曲において 1850～1860 年代が「不毛な時代」であるとするカール・ダールハウスの見解（Dahlhaus 1980: 65）を見出し語に用いた、19 世紀後半の管弦楽作品の再検証が行われた（Kirby 1995; Grotjahn 1998; Wiegandt: 1997）。これらの研究は、いずれも 19 世紀中葉の現在では殆ど取り上げられていない多くの作曲家を扱ったものである。

参考文献

- BAYREUTHER, Rainer (2005) „Raff, Joachim“, FINSCHER, Ludwig (Hg.), *Die Musik Geschichte und Gegenwart*, Kassel: Bärenreiter: Personenteil 13: 1191-1199.
- BIRKIN, Kenneth (2011) *Hans von Bülow A life for music*, Cambridge: Cambridge University Press.
- BORK, Camilla; HIPPCHE, Astrid (2016) “Suite.” LÜTTEKEN, von Laurenz (Hg.), *Die Musik Geschichte und Gegenwart Online*. Kassel: Bärenreiter-Verlag.
- <https://www-1mgg-2online-1com-04790wb07b5.han.onb.ac.at/article?id=mgg16112&v=1.0&q=Suite&rs=id-1de1ba4a-fa7a-d43b-d205-abcfd79d54d> (2018 年 9 月 24 日アクセス)
- BÜLOW, Hans von (1895-1908) *Briefe und Schriften*, I-VII, BÜLOW, Marie von (Hg.), Leipzig: Breitkopf und Härtel.
- DAHLHAUS, Carl (Hg.) (1980) *Die Musik des 19. Jahrhunderts*, Laaber: Laaber Verlag.
- DEAVILLE, James (2001) “Raff, (Joseph) Joachim”, SADIE, Stanley; TYRELL, John (eds.), *The new Grove dictionary of music and musicians*, (2nd ed.), London: Macmillan, 19: 753.
- GROTJAHN, Rebecca (1998) *Die Sinfonie im deutschen Kulturgebiet 1850 bis 1875: ein Beitrag zur Gattungs- und Institutionengeschichte*, Sinzig: Studio.
- HAAS, Dirk (2015) *Oper, Konzert und Orchester am Weimarer Hoftheater 1857 bis 1908*, Hamburg: Dr. Kovač.
- KIRBY, Frank E. (1995) “The Germanic symphony of the nineteenth century: Genre, form, instrumentation, expression”, *Journal of Musicological Research* 14(2): 193-221.
- MARTY, Res (2014) *Joachim Raff. Leben und Werk*, Altendorf: MP Bildung, Beratung und Verlag.
- MORRIS, Allan Scott (1998) “The wellsprings of neo-classicism in music: The nineteenth-century suite and serenade.” PhD diss., Toront University.
- MÜLLER-REUTER, Theodor (1909) *Lexicon der Deutschen Konzertliteratur*, Leipzig: C.F.Kahnt.
- RAFF, Helene (1925) „Joachim Raff, ein Lebensbild“, (= *Deutsche Musikbücherei*), Bd. 42, Regensburg: Gustav Bosse.
- SHADLE, Douglas W. (2016) *Orchestrating the Nation: The Nineteenth-century American Symphonic Enterprise*,

London: Oxford University Press.

SCHÄFER, Albert (1888) *Chronologisch-systematisches Verzeichnis der Werke Joachim Raff*, Tutzing: Hans Schneider.

STARGARDT-WOLFF, Edith (1954) *Wegbereiter grosser Musiker: unter Verwendung von Tagebuchblättern, Briefen und vielen persönlichen Erinnerungen von Hermann und Louise Wolff, den Gründern der ersten Konzertdirektion, 1880-1935*, Berlin, E. Bote & G. Bock.

STEINBECK, Wolfram (1997) „Nationale Symphonik und die Neudeutschen: Zu Joachim Raffs Symphonie *An das Vaterland*“. *Musikgeschichte zwischen Ost- und Westeuropa: Symphonik – Musiksammlungen*, Sinzig: Studio: 69-82.

TARUSKIN, Richard (2005) *The Oxford history of western music*, London: Oxford University Press: 3: 411-442.

WEBER, William (2004) *The musician as entrepreneur 1700-1914*. IN: Bloomington: Indiana University Press.

WIEGANDT, Matthias (1997) *Vergessene Symphonik? Studien zu Joachim Raff, Carl Reinecke und zum Problem der Epigonalität in der Musik*, Sinzig: Studio.

【記事・資料】

Anon.

- 1851 „Alfred König“ WEBER, Johann Jakob (Hg.), *Illustrierte Zeitung*. Leipzig: J. J. Weber: Nr.409: 12-13.
anno.onb.ac.at/cgi-content/anno?aid=izl&datum=18510503&query=%22Illustrierte%22+%22Zeitung%22+%221851%22&ref=anno-search
(2018 年 10 月 1 日アクセス)

Pseud. (F.W.)

- 1871 “Kurzer Correspondenzen, Wiesbaden”, FRITSCH, E.W. (Hg.), *Musikalisches Wochenblatt*. Leipzig: Verlag von E.W. Fritsch: 15: 207-209.

REINECKE, Carl

1865 Nachlass (Handschriften): Brief von Carl Reinecke an Joachim Raff - *Raffiana I.*, München: Bayerische Staatsbibliothek.

【ウェブサイト】

Digitales Archiv des Landesarchivs Thüringen.

<https://archive.thulb.uni-jena.de/staatsarchive/> (2018 年 8 月 30 日アクセス)

Bayerische Staatsbibliothek; Münchener Digitalisierungs Zentrum Digitale Bibliothek.

<https://www.digitale-sammlungen.de/index.html?c=suchen&ab=&kl=&l=de> (2018 年 8 月 30 日アクセス)

くらわき まさこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

倉脇雅子さんの海外調査は、19 世紀ドイツの作曲家、ヨアヒム・ラフに関する一次資料の調査およびシンポジウムへの参加が主たる目的でした。前回の本プログラムによる調査で、ラフ研究の最前線にいる研究者たちとの交流ができましたが、今回はそれを踏まえて、マックス・シュライバー氏とのコンタクトだけでなく、氏のご厚意によりアンヌマリー・カーライン氏を調査のアシスタントとして付けていただき、大変有意義な調査であったと思われます。ラフ研究は日本では倉脇さん以外には学会を見渡す限り他になされていませんが、ラフの祖国であるスイスや音楽活動を展開したドイツではすでになりの研究が進んでいる状況であることが、シンポジウムへの参加によって明らかになりました。本学の音楽学研究が世界の最先端で貢献するように、博士論文について今後精査し、ラフ研究に留まらず、19 世紀ドイツの現実の姿を音楽から解明できることを期待いたします。

(お茶の水女子大学 基幹研究院 人文科学系・永原恵三)

Musical distribution in the late 19th century: A case study of Joachim Raff (1822-82)

Masako Kurawaki

My close examination of the primary materials supporting the distribution routes of Joachim Raff 's symphonies and suites, not only revealed the names of some influential musicians (F. Liszt, C. Reinecke, H. v. Bülow) of the time but also some significant interactions between Raff and contemporaries.

In addition to this, participating in the Joachim Raff Symposium enabled me to grasp the current circumstances of Raff research.

In the future, I would like to further deepen my consideration on Raff's suites in particular.